小石を集める　　小川洋子

1　本教材について

高校生になって初めて手にした「国語」の教科書を開けると、最初の文章に「小石を集める」という題が付いている。読みながら、「小石」とは何だろうとまず考え、文章の中に「小石」という言葉がいつ出てくるかと探していく。「小石」という言葉が「本」と関係するということは読み進めていくとわかるが、今度は「集める」ということの中身を考えるに違いない。この文章は、そうした読む者の心の動きに留意することで、大きく活かせる文章なのである。

小川洋子を考えるとき、自己の読書体験をしっかり記憶していることに、改めて驚く。『物語の役割』（二〇〇七年、ちくまプリマー新書）は、「物語の魅力を確認し、物語の役割に目覚め、「ああ、本を読むことは何と素晴らしいことであろうか」と思ってくれたら」（まえがき）という気持から生まれた一冊だが、自分が小さい時からの読書体験が実に詳細に語られている。幼稚園の教室や歯科医院の待合室で出会った絵本から始まり、『ファーブル昆虫記』、フィリパ・ピアス『トムは真夜中の庭で』、そして『アンネの日記』と続く本との出会いを、丹念に思い起こし、どういう経験になったのかを記していくのである。もとより、それは読んだ当時そう思ったのではなく、現在からみるとそうだったのだという意味づけだが、その作業が実に自然になされており、本というものが一人の人間の中で、どう影響を与えていくのかの、格好の記録ともなっているのである。

ただ、気を付けなくてはいけないのは、そのような自己の読書体験を可能な限り明確にしなくてはいけないということを、筆者が決して主張していない点である。それは実は逆なのであり、どんな時でも、わからなくていいのだ、わかるまで待っていることが大切なのだ、というスタンスで、書かれていることなのだ。題名に即して言えば、無心に「集める」ことが大事なのではないか。この文章の指導においては、「この文章で筆者が書こうとしたことは何か」「それを何字以内にまとめよ」といったことを要求してはならないだろう。自然に筆者の言葉を辿り、本当にそうだなと思えるような感想を持つ方がはるかによいように思う。高校の最初にこんな文章に出会った、というのでよいのであり、言わばこの一文、教室で黙読してわずか十分で読める文章が、文字通り「小石」になればよいのではないか。

この書き下ろしの文章は、よく読むと自然な言葉の流れでできている。冒頭の五行、四つの文が、「落ち着く」「行ける」「聞こえてくる」「響いてくる」という現在形で結ばれている。何かを筆者が押し付けようとしている文体ではない。読む者の心に寄り添い、心を共有できるように配慮された文体だ。そう言えば、「小石を集める」という表題もそうだった。「果てしもなく遠いところ」とい

う優しい表現から始まり、第二段落で少し深まり、「新たな地平」「境界線のない場所」と受けつつ、それが、「文学の世界だけに許される自由」という大事な概念に発展する。「自由」の理解は、実は大変難しいのだが、読んでいて自然に、「自由」という世界と自分がつながったように思うのではなかろうか。小川洋子の文章の魅力は、こうした自然な深まりが、選び抜かれた言葉を駆使することで構築されていることではなかろうか。

中間部分（第三段落～第六段落）は、教科書に載っている『竹取物語』『今昔物語集』『羅生門』に具体的に触れた、作品と自分とをつなぐ梯子の例示だ。作品を読む期待を生み出してくれるような指摘がある。そして、「読書は無言の対話だ」から始まる、第七段落以降の発展（「序」「破」「急」の「急」に当たる）の見事さ。実は、その部分で初めて「小石」という言葉が出てくるのである。文章の妙味は、大事な用語をいつどのように使うかにかかっている。この文章の場合、「小石」が「宝石」の語句と関連させて使われている。高校生なら、この関係性は誰もが理解できるだろう。集めた「小石」はいつか「宝石」になる――そのことさえわかれば、この文章の理解は十分なのではないか。「自分だけの宝石」という言い回しは、読む者を安心させてくれる。「本が見せる新たな光」という表現も、すばらしい。本当に「神秘に満ちている」のだ。こうして文章を辿ることは、筆者の引いたレールに乗って進んでいくことであり、実は心地よい体験なのである。

2 指導のねらい

(1) 文中の「小石」「宝石」という言葉に注意しながら文章の中身を理解できるよう、無理のないように生徒を導く。

(2) 文章全体の構成（「序」「破」「急」、あるいは「問題設定」「具体例による検討」「そこから生まれる新しい認識」という構成）を感づかせるような、わかりやすいアドバイス。

(3) 筆者の指摘を読者が自分のものにできるような、表現上の工夫（現在形の文体の活用、重要語句の提示の仕方など）の確認。

3 教材の目標

目標については、「単元の目標一覧」をご確認ください。

4 評価規準

(1) 言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることを理解している。 知技(1)ア

(2) 我が国の言語文化の特質について理解している。 知技(2)ア

(3) 進んで言葉には、文化の継承、発展、創造を支える働きがあることや、我が国の言語文化の特質について理解し、学習の見通しをもって、自分の言語文化のルーツについて学ぼうとしている。 主態

（中島国彦）